様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３５４０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２２４０

研究課題名（和文）キリスト教の起源―初期キリスト教におけるマタイ福音書受容史から見た一断面

研究課題名（英文）The Origin of Christianity: from the perspective of the reception history of Matthew's Gospel in early Christianity

研究代表者
澤村　雅史（SAWAMURA, Masashi）

広島女学院大学・共通教育部門・教授

研究者番号：５０５４９３２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：「キリスト教」はいつから「キリスト教」になったのか。本研究ではこの問いに取り組むために、使徒教父文書においてマタイ福音書がどのように「受容」されているかに着目し、2世紀の教父イグナティオスの手紙におけるマタイ福音書の「受容」に「近さ」と「隔たり」という相反する要素を見出した。この矛盾要素はマタイ共同体からイグナティオス共同体が分離していくプロセスを反映していること、そしてこのプロセスはイグナティオス共同体の内的必然性に加えてローマ帝国による圧迫という外的条件の変化がもたらしたものであり、「ユダヤ教」、「ユダヤ主義的キリスト教」、「キリスト教」に向けての分離と確立の萌芽であることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、マタイ福音書の初期キリスト教における「受容」について聖書学の視点から分析を行う中で、イグナティオスの手紙が示すマタイ福音書への「近さ」と「隔たり」を見出し、イグナティオスの「反ユダヤ」的言説はユダヤ教ではなく、マタイ福音書に代表される「ユダヤ主義」に向けられたものであることを論証した。これにより、従来広く受け入れられてきた「ユダヤ教」から「キリスト教」が生まれたという単純化された構図を否定し、「キリスト教の起源」を巡る問いをいわゆる「置換神学」の呪縛から解放すること、そして21世紀における宗教や民族を巡る建設的対話の出発点を見出すことに寄与したと考える。

研究成果の概要（英文）：When did 'Christianity' become 'Christianity'? In order to address this question, this study focused on how the Gospel of Matthew is 'received' in the Apostolic Fathers' documents and found a contradictory element of 'proximity' and 'separation' in the 'reception' of the Gospel of Matthew in the early second century letters of the Church Father Ignatius. This contradictory element reflects the process of separation of the Ignatian community from the Matthean community, which was the result of the internal inevitability of the Ignatian community as well as the changing external conditions of oppression by the Roman Empire, and which led to the establishment of 'Judaism', 'Jewish Christianity' and ' Christianity'.

研究分野：新約聖書学

キーワード：マタイ福音書　イグナティオスの手紙　受容史　初期キリスト教

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

キリスト教の伝統の中だけでなく、近年に至るまでのマタイ福音書研究史においてさえも、同福音書はその執筆時点においてすでに、母体であるユダヤ教と袂を分かったキリスト教の側に立った自己理解と執筆意図に基づいて著されたとする理解が主流を占めてきた。この理解はユダヤ教に対するキリスト教の優位性を弁証しようとする置換神学（神の民であるユダヤ人の地位は廃棄され、キリスト教徒によって受け継がれた）の根拠となり、「その血の責任は、我々と子孫にある」（マタイ 27:25・新共同訳）との言葉に基づくユダヤ人差別や迫害さえ生み出してきた。しかし実は、マタイ福音書が「キリスト教」文書として執筆されたというのは自明のことではない。

我々は、同福音書がキリスト教文書であることに疑問を唱え、同福音書をユダヤ的宗教[1]の枠内に位置づける intra muros（壁の内側）説を援用しつつ、同福音書の成立に関する新しい説明モデルを提示した[2]。Intra muros 説とは、Günter Bornkamm[3]による問題提起に端を発し、「形成期のユダヤ教」(Formative Judaism)における諸セクトの多様で複合的な競合関係の中にマタイ福音書の成立を位置づけた J. Andrew Overman[4]と Anthony J. Saldarini[5]らによる議論を経て、現在ではマタイ福音書が律法の完全なる遵守を重んじる立場に立っていると見る David C. Sim[6]らを中心に展開されている学説である。我々は、マタイ福音書の成立をユダヤ的宗教の枠内に位置づけることについてはこれらの先行研究に同意しつつ、従来の intra muros 説ではマタイ福音書における「異邦人」（非ユダヤ人）に対する両義的評価を十分に説明できないことに着目し、「律法全体の完全なる遵守を基準とする神の民の再編」というモチーフをマタイ福音書のテクスト内に見出すことによってこの問題の解決を試みた。その論証の過程において我々は、マタイ福音書がその成立時点においては「主流派のキリスト教」ではなくむしろ、ユダヤ教およびキリスト教の形成途上にあって諸集団の競合関係の中で周縁化されつつある運動（もしくは信仰共同体）に属することを見出した。Ulrich Luz はマタイ福音書の記者が「最終的には、非キリスト教的イスラエルと普遍的教会との間に現れる独立的な周辺現象としての存在に導く独自の分離の道か、あるいは異邦人伝道に門戸を開き、そのことによって終局的には普遍的教会の中に統合されることに通じる方向へ原則的な一歩を踏み出す可能性か、その間のいずれを選ぶのかの決断に〔立たされている〕。マタイはこの第二の道の始めに立っている」[7]と述べているが、我々が見出したのは、マタイはむしろ前者の道に立っているということである。

２．研究の目的

一方で、マタイ福音書がキリスト教の正典成立時から新約諸文書の冒頭に置かれてきたことは、キリスト教がその初期から同福音書を重視してきたことを反映していると考えられる。また、使徒教父文書における参照頻度が際立って高いことも、この福音書への評価を示していると考えられる。すなわち、早くから（少なくとも正典成立以降の）キリスト教の伝統の中で、マタイ福音書がキリスト教文書として扱われてきたこともまた事実なのである。よって前項で述べた知見からは、マタイ福音書は、どのようにして「キリスト教文書」としての性格を備えていくことになったのか、という新たな課題が見出されることになる。

本研究の目的はこの課題への答え、すなわちマタイ福音書を担った運動（あるいは共同体）自体が周縁化され、やがてそれ自体としては消滅していく一方で、その福音書はなぜ、どのようにして、キリスト教の中心的教義を担い、新約聖書正典の冒頭を飾るに至ったのか、という問いの答えを見出すことにある。

３．研究の方法

本研究ではこの課題について、当初は以下の方法により取り組むことを目指した。

１）Édouard Massaux による、使徒教父文書に対するマタイ福音書の影響についての広範な研究[8]との批判的対話を通じて、初期キリスト教における同福音書の位置づけを探る。
２）マタイ福音書受容史の比較対象として、マルコ福音書の受容史や、ミシュナーの成立についても概観する。
３）本研究を進めるにあたっての基礎的取り組みとして、マタイ福音書のキリスト論の特徴を見出すことを試みる。キリスト論は初期キリスト教においてマタイ福音書が「キリスト教文書」として解釈されていくにあたり極めて重要な要素と考えられるからである。

研究を進める中で、当初の研究目的を達成するためには、上記１）に関連して使徒教父文書全体を網羅する視座よりも、一つひとつの文書について深く掘り下げることのほうが有効であることを見出したため、研究の方向性を修正した。上記２）については、必要に応じて参照するにとどまった。

４．研究成果

(1) マタイ福音書の「キリスト論」について

本研究の目的は前述のとおり、マタイ福音書が「キリスト教文書」としての性格を備えていくプロセスを、使徒教父文書における同福音書の受容史の視点から明らかにすることである。そのための基礎的な研究として、まず同福音書の「キリスト論」を明らかにすることを試みた。

そのため、同福音書の結語の位置にあるマタイ 28:16-20 の釈義的な分析を行ったが、それは、この箇所が同福音書のキリスト論を総合する意図に基づくマタイの編集によって構成されていると考えられるからである。結果として「キリスト教は母体となるユダヤ教という一個の宗教から分離して成立した」という線形的な理解では、マタイ福音書のキリスト論の特徴を捉えきれないことを確認した。そして、同箇所のうち、キリスト教の中心的教義である三位一体論の聖書的根拠として扱われてきた、マタイ 28:19b の三称定式（Triadic Formula）が、同時代のユダヤ教、なかでも第二神殿期に成立したと考えられる「二神的一神教」の枠組みから理解可能であることを論証した。このことは、マタイ福音書成立時点において、「ユダヤ教」と「キリスト教」が、確立した宗教主体同士として対立関係にあるのではなく、流動的な境界線をめぐって反発し、影響を与え合いながら自己形成していく過程にあることを示していると考えられる。この発見により、使徒教父文書と同福音書の関係を、キリスト論という指標において評価するという、研究上の視点を得ることができた。この成果は日本新約学会第 56 回学術大会に発表し、質疑応答を踏まえて改稿したものを広島女学院大学国際教養学部紀要第 5 号（2018 年 3 月発行）に発表した。さらにその後、本研究を継続する中で得た知見を加えた内容を 2018 年 9 月に岡山大学で行われた国際学会である ASIA-PACIFIC EARLY CHRISTIANITY STUDIES SOCIETY 12th Annual Conference において発表した。

(2)イグナティオスの手紙によるマタイ福音書参照

次に、前述の Massaux の研究において扱われている、使徒教父文書におけるマタイ福音書参照箇所の網羅的検証を試みる中で、イグナティオスの手紙における参照頻度が特に高いことを確認した。実際に研究史上でも、イグナティオスの手紙とマタイ福音書の関連についてはしばしば指摘されてきたが、その成立年代や場所が比較的明らかであり、一見して「反ユダヤ教」的とされる記述が見いだされるなどの点からも、本研究の目的を達成するためにイグナティオスの手紙に焦点を当てることは有効であると判断した。

Massaux が挙げるイグナティオスの手紙におけるマタイ福音書参照箇所を、他の研究者による批判を踏まえて精査し、釈義的に分析することにより以下のことが明らかになった。

a. イグナティオスはマタイ福音書の枠組みを物語的に、またモチーフ的に参照しており、口頭伝承や断片資料ではなく、マタイ福音書を文献的に参照していると考えられる。
b. イグナティオスがマタイを参照する箇所の多くは、「ユダイズム」（ιουδαϊσμός）批判や監督の権威の確立など、イグナティオスの重要な思想に関わりがある。
c. イグナティオスはマタイ福音書の神学理解を踏襲しているとは言えない。中でも「義」理解における隔たりは大きく、イグナティオスはこの点ではむしろパウロに近い。

(3) キリスト教の起源～マタイ福音書とイグナティオスの手紙の関係が示すもの

これらの発見が示す、イグナティオスの手紙とマタイ福音書の言語的「近さ」と思想的「隔たり」が意味するものについて、本研究では続けて、両者の地理的、歴史的、社会的背景をもとに詳しく考察を行った。この考察にあたっては、Magnus Zetterholm[9]による、イグナティオスの教会はマタイ共同体から分離したという仮説を援用し、批判的検証を加え、後述するような修正を試みた。

① マタイとイグナティオス―いかなる分離か？（Zetterholm 説）

Zetterholm はマタイ福音書を生み出した共同体を、アンティオキアのユダヤ人キリスト者を中心としつつ異邦人化が進みつつある共同体と想定し、イグナティオスのグループはそこから分離する過程（の頂点）にあったことを資源動員論 (resource mobilization)という社会学的枠組みによって説明している。マタイ福音書自体も、母体となる多数派の（ファリサイ的）ユダヤ教から分離するにあたり、そのイデオロギー的資源を論争に用いたのであるが、まったく同じ構図がマタイ共同体とイグナティオスの共同体の間にも生じたという。すなわち、ユダヤ人からユダヤ人キリスト者（Zetterholm の分類では「イエスを信ずるユダヤ人 (Jesus-believing Jew)」）が分離し、そこから異邦人のグループ（すなわちイグナティオスのグループである「イエスを信ずる異邦人 (Jesus-believing Gentile)」）が分かれたのであって、イグナティオスの手紙が示している断絶は「ユダヤ教」と「キリスト教」ではなく、「イエスを信ずるユダヤ人」（マタイ共同体）と「イエスを信ずる異邦人」（イグナティオス共同体）の間に生じたものだというのである。

② fiscus Judaicus がもたらしたもの

この「イエスを信ずるユダヤ人」と「イエスを信ずる異邦人」との間に亀裂が生じたそもそもの原因について、Zetterholm は fiscus Judaicus（ユダヤ金庫税）が関係していると論じている（fiscus Judaicus はユダヤ戦争の鎮圧後にヴェスパシアヌス帝がユダヤ人を自認していた者、すなわち神殿税を納めていた者を全て徴税対象として設立した）。

ユダヤ戦争以前よりユダヤ人共同体には、ユダヤ人、改宗者、神を畏れる者（改宗にまでは至らない異邦人信徒）の三者が共存していた。このうち神を畏れる者たちはユダヤ人共同体の庇護を受けつつ、ローマ祭儀への参加も拒まないことで、ユダヤ人と異邦人の中間的な存在と位置付けられていた。ところが、fiscus Judaicus によってこのあいまいな立場を維持することは困難と

なり、ローマ祭儀に恭順するか、ユダヤ人共同体の一員として fiscus Judaicus への納税を行うか、立場を明らかにすることが求められるようになった。この際に、より困難な状況に追いやられたのは「イエスを信ずる異邦人」であった。彼らはエルサレム使徒会議によって、改宗もローマ祭儀への参加も禁じられたていたからである。この fiscus Judaicus によって生じた困難が、のちの「ユダヤ教」と「キリスト教」への分かれ道となる、「イエスを信ずるユダヤ共同体」（マタイ共同体）からの「イエスを信ずる異邦人」（イグナティオス教会）の独立を決定づけたと Zetterholm は論ずる。fiscus Judaicus が「ユダヤ教」と「キリスト教」の分離をもたらしたと考えられることについては、これまでも複数の研究者によって指摘されてきたが、この分離を「イエスを信ずるユダヤ共同体」内部の問題と位置付けたことが Zetterholm 説の独自性である。

③　「分離」はいつ始まったか？―キリスト教の起源

しかし、本研究では両者の分離は fiscus Judaicus の導入そのものによって引き起こされたのではなく、後のドミティアヌス帝による徴税の厳格化と、続くネルヴァ帝による緩和によって引き起こされたとの仮説を見出した。まず、fiscus Judaicus の導入をきっかけに「イエスを信ずる異邦人」あるいはキリスト教徒が独立して新しいグループを形成したことは、同税がユダヤ「民族」が「父祖の慣習」を重んじてローマ祭儀への参加などの市民的義務を免除されるための代償としての性格をもっていたことからすれば、考えにくい。ローマ祭儀を避けようとするならば、ローマ帝国が重んずる価値である「古さ」（由緒正しさ）をユダヤ共同体に属することによって証明する必要があった。それゆえ潜在的な亀裂はあったとしても、実際の分離は困難であったはずである。

そして、ドミティアヌスによる徴税の厳格化により、ローマ祭儀にまつろわぬ者や納税の義務から逃れた者たちに対する誣告が奨励され、祭儀参加か、fiscus Judaicus の納税か、さもなくば財産没収や死によって報いられる状況が生み出され、分離はより一層困難となった。

この困難が解決されたのは、ドミティアヌスの暗殺後に皇帝の位についたネルヴァが行った fiscus Judaicus に関する誣告の廃止などの緩和措置によってであったと考えられる。これにより、イエスを信ずる「神を畏れる者」はもはや律法を守ることによってユダヤ民族の一部であることにとどまる必要はなくなった。彼らはここに至って「異邦人キリスト者」グループの形成へと向かう分離への一歩を踏み出したと考えられる。

ネルヴァによる改革（96 年）の後、2 世紀初頭に書かれたイグナティオスの手紙におけるマタイ福音書「受容」は、分裂に至って比較的間もない、後のキリスト教の原形となる共同体の自己確立の過程、すなわち本研究がその探求を目指した「『キリスト教』の起源」を映し出していると考えられる[10]。

④　キリスト教の成立≠反ユダヤ教

上記のように、異邦人キリスト者グループが独立して活動することが可能になった 96 年に外形的な「『キリスト教』の起源」を見出し得る一方で、キリスト教徒の自己理解はそれ以前からはじまり、段階的に形成されていったと考えるのが自然である。前項で述べた想定が妥当であるとすれば、イグナティオスはなお「キリスト教」信徒としての自己理解の形成途上にあったと考えられる。それゆえイグナティオス（Ign. *Magn.* 8:1; 10:3; Ign. *Phld.* 6:1）において χριστιανισμός との対比で述べられる反 ιουδαϊσμός は、「キリスト教」による反「ユダヤ教」を意味しておらず、むしろマタイ共同体における律法遵守への志向という「ユダヤ主義」の否定であることを、本研究は見出した。この発見はキリスト教の起源を反ユダヤ主義や置換神学の呪縛から解放することに貢献しうると考えられる。

以上の成果は 2021 年 3 月にオンラインで行われた日本聖書学研究所例会にて発表し、内容の一部を広島女学院大学論集第 69 巻（2022 年 3 月発行）に発表した。当初招致を予定していた国際学会での発表は、同学会がコロナ禍の影響を受けて中止となったため、行うことができなかった。今後、議論をより精緻化して別の国際学会での成果発表を目指したい。

また本研究では、既述のように「『キリスト教』の起源」について探求において一定の成果を得ることができたが、マタイ福音書がいつ、どのようにキリスト教文書としての性格を備えるようになったかについては、その一端を解明するにとどまった。この問題については、使徒教父文書の中でも今回分析の対象とするに至らなかったディダケーにおけるマタイ受容の研究や、イグナティオスの手紙自体がどのように初期キリスト教の中で受容されていったか、そのプロセスを探求することを通して解明することができると見通される。

---

[1] キリスト教発生の土壌となった、古代イスラエルに起源をもつ宗教のことを単純に「ユダヤ教」と呼ぶことができるか否かについても議論があるが、決定的な呼称はまだ学術的に確定していない。ここでは便宜上、我々はそれを（学術的には正確さを欠いている呼称ではあるが）「ユダヤ的宗教」と呼ぶこととする。

[2] 澤村雅史『「福音書記者」マタイの正体―その執筆意図と自己理解』、日本基督教団出版局、2016 年。

[3] Günter Bornkamm, “End-Expectation and Church in Matthew,” in G. Bornkamm, G. Barth and H. J. Held (eds.), *Tradition and Interpretation in Matthew*, London: SCM Press, 1963.

[4] J. Andrew Overman, *Matthew's Gospel and Formative Judaism: The Social World of the Matthean Community*, Minneapolis: Fortress, 1990.

[5] Anthony J. Saldarini, *Matthew's Christian-Jewish Community*, Chicago: University of Chicago Press, 1994.

[6] David C. Sim, *The Gospel of Matthew and Christian Judaism: The History and Social Setting of the Matthean Community*, Edinburgh : T&T Clark, 2000.

[7] ウルリヒ・ルツ著、小河陽訳『マタイによる福音書（1－7 章）』（EKK 新約聖書註解 I/1）、教文館、1990 年、85 頁（〔〕内は引用者による）。

[8] Édouard Massaux, *The Influence of the Gospel of Saint Matthew on Christian Literature Before Saint Irenaeus*, Norman Belval & Suzanne Hecht (trans.), Arthur Bellinzoni (ed.), 3 vols. (Macon, Georgia: Mercer University Press, 1990).

[9] Magnus Zetterholm, *The formation of Christianity in Antioch: a social-scientific approach to the separation between Judaism and Christianity* (London, New York: Routledge, 2003) .

[10] この結論は Marius Heemstra, *The Fiscus Judaicus and the Parting of the Ways*, WUNT 2. Reihe 277 (Tübingen: Mohr Siebeck, 2010)が示す「ユダヤ人とキリスト教徒の区別がローマの文書に常のように見られはじめるのが 96 年以降であることは、偶然とは思われない」（同書 p. 194）との観察結果とも一致している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 澤村雅史	４．巻 69
２．論文標題 「『初期キリスト教』におけるマタイ福音書の『受容』について ―イグナティオスの手紙から ―」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 広島女学院大学論集	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 澤村雅史	４．巻 5
２．論文標題 「マタイ福音書のキリスト論―マタイ28:16-20を手掛かりに―」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 広島女学院大学国際教養学部紀要	６．最初と最後の頁 79-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 澤村雅史
２．発表標題 「初期キリスト教」におけるマタイ福音書の「受容」について～イグナティオスの手紙から
３．学会等名 日本聖書学研究所 例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Masashi Sawamura
２．発表標題 ”The Christology in Matthew 28:16-20 -The Origin, Purpose and Effect of the Triadic Formula-“
３．学会等名 ASIA-PACIFIC EARLY CHRISTIANITY STUDIES SOCIETY 12th Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Masashi Sawamura
２．発表標題 "ANOMIA in Matthew: an exegetical analysis of its subject"
３．学会等名 The 5th Conference of Asia-Pacific Liaison Committee Conference of Studiorum Novi Testamenti Societas（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 澤村雅史
２．発表標題 「マタイ福音書のキリスト論 -マタイ 28:16-20 を手がかりに-」
３．学会等名 日本新約学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 William Loader , Boris Repschinski , Eric Wong (eds.)	４．発行年 2019年
２．出版社 innsbruck university press(iup)	５．総ページ数 266頁中75-87頁
３．書名 ANOMIA in Matthew: an exegetical analysis of its Meaning" in Matthew, Paul, and Others: Asian Perspectives on New Testament Themes	

〔産業財産権〕

〔その他〕

【講演】「マタイ福音書における『不法』と危機意識」、関東神学ゼミナール 2019年度fad夏期合宿
【講演】「マタイ福音書における『異邦人』」、関東神学ゼミナール 2019年度fad夏期合宿

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関